

○ 渡邊 理香 氏（平成8年、娘（当時6歳）を交通事故で失う）

〔要旨〕

#### 娘の事故と当時の状況

平成8年7月18日、夏休みを2日後に控えたその日、集団下校中の子どもたちの列に、糖尿病の持病のある加害者の車が意識もうろうとした状態で突っ込み、当時小学校1年生だった娘を直撃して死亡させ、もう一人の男子児童にも怪我を負わせる事故が起きました。娘は搬送先の病院で、事故のわずか2時間後に、そのあまりにも短い生涯を閉じました。

事故発生後間もなく、事故現場に着いてしまった当時小学校3年生だった長男は、血だらけで倒れている妹が救急車で搬送されていく姿を見てしまい、現場に落ちていた妹のランドセルを胸に抱きしめながら、「轢かれたのは僕の妹だ！」と泣き叫んでいたところを、近くの方が保護して自宅へ電話をくださったのでした。

娘は青信号で横断歩道を渡っていたところを一方的に殺されたのにも関わらず、加害者は病気が理由となり一旦は不起訴となりました。しかし私どもが検察審査会に申立を行った結果、加害者は逆転起訴され、事故から4年後の平成12年3月3日に、禁固1年8か月、執行猶予3年の判決が下ったのです。この日は、生きていれば10歳になるはずだった娘祥子の誕生日でした。

執行猶予付き判決ということは、加害者は刑務所に入らずに済む、事故前と変わらない生活を送れるということです。私は犯した罪に対して軽すぎる判決だと上告を願いましたが、認められることはありませんでした。当時は、事故状況や加害者についても何ひとつ知らされることはありませんでした。そのため、加害者が不起訴処分に終わったことさえも分からず、検察からの事情聴取の知らせを信じ、ただひたすら待っていたのです。情報が何ひとつ入らない中、全て自分たちで手さぐりで調べ、事故がなぜ起きたのか、どんな事故だったのか、今何をやらなければならないのかを必死に探す日々を強いられました。

突然の事故で大切な家族を失った時、家族だけではその過酷な状況を受け入れることは困難となります。私は何をどうしていいのかさえも分からず、自分を責め続けていました。自分のことで精一杯で、遺された子どもたちの世話も、ましてや子どもたちの気持ちを考えてやることなど思いもしませんでした。子どもたちが視界に入っている、その姿を見てはいなかったように思います。

そんな中、周囲からかけられたのは、「他にも子どもがいるだろう」「母親なんだからしっかりしろ」「もっと頑張らなくては駄目だろう」そんな言葉の数々でした。そんなことは言われなくても分かっていました。それでも、娘を失ってしまった悲しみはあまりにも大きく、自分でも自分をどうすることもできなかったのです。

#### 危険な通学路、子どもたちの命を守るためには

娘は、入学する前から小学校に行くのが楽しみで、買ってもらったばかりのランドセルを背負いながら遊んでいました。学校に通う時、娘のランドセルが嬉しさと飛び跳ねるように揺れていたのを、今でも覚えています。私は子どもたちの成長が何より楽しみでした。参観日には、長男の3年生のクラスと祥子の1年生のクラスを半分ずつ見学し、嬉しそうに学校で過ごしている子どもたちの様子を見るのが何よりも幸せでした。忙

しい毎日でしたが、その日々はその後も続いていくと信じていました。

通学路は、朝晩交通量が多く路線バスも通り、大変危険な道路に面していました。娘の事故現場は、手押し式信号の横断歩道で、小さな縁石や欠けている縁石がある以外は子どもたちを守ってくれるものは何もない、大変危険な場所でした。娘は手押し式信号を押し、自宅のある方向に横断歩道を渡っているところを加害者車両に直撃されました。現在の事故現場は、歩道も道路幅も広くなり、子どもたちが無防備に立つしかなかった場所には頑丈なガードレールが取り付けられました。

娘の事故前、私はPTAの役員をしており、通学路の安全点検を行い、危険箇所の改善を学校を通して関係機関にお願いしていたのですが、「危険な通学路はここだけではない」と、なかなか整備をしていただけませんでした。しかし娘の事故後間もなく、縁石は付け替えられ、通学路は改善されました。近所の方から、「祥子ちゃんのおかげで通学路がきれいになった」と言われましたが、私は20年以上経った今でも、この現場を通るのも嫌です。

私は当時、就学前の子どもたちが交通ルールを守ることの大切さを学ぶ「かもしかクラブ」の地区リーダーとして活動していました。娘も幼い頃からかもしかクラブに参加し、人一倍交通ルールを守っていました。入学前、娘と通学路を歩き、歩き方の練習をしました。事故に遭ってほしくなかったからです。しかし娘の命が奪われたのは、「安全だ」と私が娘に教えた通学路の横断歩道でした。私は、あと何をすれば、娘を守れたのでしょうか。

「自分の命は自分で守ろう」。これは、入学した時、学校からのお便りに書いてあった言葉です。しかし、どんなに気を付けていても事故は起こり、子どもたちが一方的に命を奪われる。そんな状況が娘の事故の時も、そして現在もなお起きているのです。

## 20年近く経って、息子と話をして分かったこと

当時は、被害者は置き去り状態で、私は自分自身のことさえまならなくなり、家族のこと、子どものことを考えられる状況ではありませんでした。PTSD、心のケア、被害者支援、そういった言葉さえ全く耳にしなかった時代、私はその必要性も分からず、何ひとつ子どもたちに心を寄せてあげることができなかったのです。

事故から20年近く経って、封印をしていた事故当時のことを長男と話し合い、初めて分かったことがあります。祥子が搬送された病院で待っていた時、長男は、「祥子は大丈夫だよ。祥子が救急車に乗せられた時、僕『祥子！』て叫んだんだ。そしたら祥子は『お兄ちゃん！』ってちゃんと答えたんだ。だから絶対に大丈夫だよ」と言って、呼吸もうまくできず体がしびれ、椅子に座っていることもできなくなっていた私を、ずっと隣で励まし続けてくれたのです。

そして四十九日を過ぎた頃、私が自責の念にかられ自殺も考えるようになってしまい、自分を失いかけていた時、私のそばに来て、「あの時の話は間違っていたの。祥子はね、最後に『お兄ちゃん』じゃなくて、『お母さん！』て、お母さんのことを呼んだんだよ」と言ってきたのです。息子は、幼心にも母親の異変を感じ、なんとかしなければならぬと考えたのだと思います。これがきっかけとなり、私は、つらい、苦しい思いを

しているのは自分だけではないことに、やっと気が付くことができ、自分がやらなければならないことを考え始めたのです。

事故当日、娘が亡くなり処置室から私が半狂乱で出てきた時、長男が「お母さん、僕たちもいるんだよ！」と叫んだのだそうです。しかし、その声さえ、その時の私には届いていなかったのです。私が処置室に通された後、親戚が病院に駆けつけるまで、長男はたった一人で廊下で待っていたそうです。どんなに心細かったか。そして、必死に私に向けて叫んだその思いさえも、私は受け止められなかったのです。

私を気遣うような言動は他にもありました。その年の夏休みのプール開放日から帰ってきた長男が、「お母さん、事故現場に祥子が座っていたから、僕、一緒に帰ろうって言って、ちゃんと祥子を家まで連れて帰ってきたからね」と言ってくれたことがあります。

また、夏休みが終わり学校に行った時、先生に「夏休みはいつからですか」と聞いたそうです。先生は「もう終わったばかりでしょ」と驚いたように答えられたそうです。その夏休みは、私たちはさまざまな作業に追われてしまい、子どもたちは放ったらかしの状態でした。そのため、長男には夏休みを過ごした記憶が全く無かったのではないかと思います。

それから、悪夢にうなされていたそうです。外から学校を見ている自分がいて、外はものすごく明るい日差しなのに、妹がいた1年生のクラスだけがものすごく暗くて気持ち悪い感じがして目が覚める、そんな夢を何回も見てうなされていたそうです。今思い出しても、気味が悪いほどに怖い感じがすると話してくれました。

また、次男と以前より揉めるようになりました。次男とは6歳年が離れており、祥子がいた頃はほとんどケンカをすることはなかったのですが、クッション役の祥子がなくなったせいだろうと思います。次男は当時2歳になったばかりで救急車両が大好きでした。事故後、救急車両の出ている番組を見てみると、長男が飛んできてテレビを消して、「お母さんは、こういうのは今、見たくないんだから！」と言い、ケンカになってしまったことが度々あったようです。長男は、「あの時、お母さんからケンカをするなど叱られ、すごく嫌だった」と、その時の気持ちを話してくれました。

しかし、今思い返しても私の記憶の中の当時の息子の様子は、普段と変わらない、事故のことさえも分かっていないかのように元気に遊んでいる姿が思い出されます。息子は事故の話は一切しませんでした。本当に、覚えていないかのように、事故のことは忘れてしまったのではと私は感じていました。

### 事故当時2歳前だった次男の様子

あくまでも私から見た状況ですが、一人で本当におとなしくしていました。ただ、出棺の前日はとてもぐずって、私が添い寝をしてやっと眠りにつきました。しかしそれ以外は私のそばには一切来ませんでした。親戚が来てくれているせいだと私は思っていました。幼いながらも母親の異変に気が付いていたんだと思います。

いつものように遊んでいたように私は思っていました。2歳の誕生日前でしたので、何も分かっていないと思っていました。かなりの衝撃を受けていたことが後で分かりました。事故前には虫歯など1本もなかった

のに、私が気が付いた時には、全ての歯が虫歯になっていました。歯医者さんから、子どもは何か急激なストレスが加えられると一瞬にして虫歯になってしまうことがあるんだと教えられました。

また、ある日、私のそばに来て「お母さん、祥子ちゃん、死んじゃったの。死んだら一緒に遊べないの。何かドラえもんに出してもらえないかな。生きてる祥ちゃんにしてくれる道具を」と言ったのを覚えています。しかし、こんな言葉をかけられていたのに、私は子どもたちに寄り添うことはできませんでした。本当に、ほったらかし状態にしていたのです。次男は甘えてもきませんでした。甘えてこなかったのではなく、甘えられない状況に私が置いたのだと思います。

### きょうだいを亡くした子どもたちに必要な周囲の対応

その時必要だったのは、何が起きたのか子どもたちへ説明することだったと思います。

事故直後から家族中の生活が一変しますので、子どもに対して事故の説明をできる状況ではありませんが、子どもたちも衝撃を受けていますので、やはりきちんと気持ちを受け止め、その年齢に合わせて、事故についての説明を行うことが必要だと思います。何が起きているのかもよく分からずにただ置かれてしまうことは、余計な不安を募らせることにつながると思います。

また、子どもたちの気持ちに寄り添うことができる人の存在が必要です。家族の中では、事故の話はタブー

となります。親も自分の悲嘆で心の余裕が全くありません。周囲の方が子どもの様子に気を配ってくださることで、子どももつらい気持ちを抱え込まずに済み、話せる時にそれを受け止めてくれる人がいるということが安心につながっていき、それがすごく大事な存在になるのではないかと思います。

それと、周囲の方々の理解です。子どもの様子を見守りながら、普段通りの生活を行えるようにすることが重要だと思います。きょうだいを失った後に元気になっている様子を見て、違和感を持った目で見たり、逆に気を遣い過ぎて普段の生活から遠ざけることのないようにすることが大切だと思います。子どもの気持ちや意思を尊重し、大人の判断で学校を休ませたり無理に行かせたりしないようにしていただきたいと思います。

ある被害者のお話ですが、亡くなったお兄さんの服を着て学校に行ったのですが、担任の先生から「どうしてそんな服を着てきたのか」と注意を受け、傷付いたことがあったそうです。女の子が大きい男の子のぶかぶかの服を着ていったので、先生が注意したらしいのです。また親であっても、亡くなったきょうだいの服を自分の目の前で着られるのがすごく嫌で、「その服を着ないで」と注意をしてしまい、後悔しているというお話をされた遺族もいます。子どもの悲しみの表現の仕方はさまざまな形で現れてきますので、周囲は頭から否定せず、なぜそのような行動を取るのか受け止めることが必要だと思います。

学校で行われている行事についても、参加を無理強いしないでください。きょうだいを亡くした小学生のお

#### その時必要だと思われる事

- ・何が起きたのか子供に対する説明
  - ・子供達の気持ちに寄り添うことが出来る人、話を受け止めてくれる人の存在
  - ・周囲の方々の理解(普段通りの対応)  
(事故後に起きてくる様々な反応を特別視しない)
  - ・子供の気持ち、意思を尊重し周りの状況を整える対応
  - ・同じような経験をした方との交流
  - ・母親の気持ちに寄り添い支えてくれる人
  - ・安全で安心していられる場所(親、子それぞれに)
- 子供の発達段階によって表に現れてくるものやその変化も違うので、それに合わせそれぞれに対応することが大切だと考える

子さんが、学校の交通安全教室に参加したくないと先生に伝えたのですが、これは学校行事の一環で全員参加だからと言われて参加せざるを得なくなり、非常にづらい思いをしたというお話を聞きました。このようなことに対して、きめ細かな対応をしていただきたいと思います。

子どもによって表に現れてくるものは違いますし、変化していきますので、それぞれ、その都度対応することが大切だと考えています。

## 学校との関わりの中で望まれる支援

年齢や生活状況によって、子どもの悲嘆の表現の仕方はさまざまです。まずはそのことに心を寄せていただきたいと思います。必要だと感じた時には声をかけ、気持ちを受け止めていただきたいと思います。学校と家庭がつながり、気になる様子があれば連絡を取り合える体制を作っていただきたいと思います。現在では、家族を突然失った子どもに対しての絵本やさまざまな冊子がありますので、それも活用していただき、文字や絵を通して、今、自分の身に起きているこ

とは異常なことではないということを親子ともにまず理解していただくことが大変大切だと思います。親御さんに対しこういった情報提供も含め、子どもたちとの接し方についてアドバイスしていただきたいと思います。

学校 PTA の方々に、被害者心情について理解を深めていただく機会があればよいと思います。私の場合、長男の参観日など学校行事に行く必要がある時は、目に見えない鎧を身に着けないと出向けないような状態でした。子どものためにさまざまな行事に行かなければならないと思うのですが、娘の思い出が詰まった、しかし娘がいなくなってしまった学校に行くことはあまりにもつらかったからです。私には友人もたくさんいたはずだったのに、誰もそばに来てくれませんでした。なんと声をかければいいのか分からなかったのだと思いますが、周りに大勢人がいるのにも関わらず、ものすごい孤立感と孤独感に襲われ、耐えられませんでした。何気ない会話、以前と同じような対応をしていただきたかったのですが、それも叶いませんでした。

卒業式、入学式への配慮ですが、私は娘に、他の子どもたちが経験できることは全てさせてやりたいという思いが強くあり、卒業の年、卒業証書をいただけないかと学校にお願いをしました。すると校長先生が、卒業証書の代わりとして手書きの心温まる内容の卒業の証を、担任の先生と共に自宅に届けてくださったのです。大好きだった小学校に娘が通えたのはわずか3か月余りでしたが、その娘の気持ちを形にして残したかった、娘の生きた証として卒業証書をいただきたかったのです。子どもを亡くした親の中には、同じような思いを抱いている方が大勢いらっしゃると思います。被害者側からこういったことを要望するのではなく、同じ保護者や学校側から、このような提案をしていただければ有り難いと思います。

### 学校との関りの中で必要と思ったこと

- ・他の兄弟に対するサポート
- ・子供への接し方のアドバイス（父兄に対して）
- ・学校、PTA等周囲の方々に被害者心情について理解を深めていただく機会
- ・亡くなった子供の荷物の受け取り時の心配り
- ・卒業式、入学式等への配慮
- ・様々な行事に対する配慮（親子共々）
- ・子供の気持ちを汲み取った対応
- ・子供を特別視しない
- ・学校と支援側との連携（支援に関する共通理解）

## 被害者を理解し、さまざまな立場の人が寄り添う支援を

「命の授業」で、私が子どもたちに読んで聞かせている詩があります。息子が小学校5年生になる頃に、学校の先生から「お母さんの言葉で子どもたちに命の大切さを伝えてほしい」という依頼があり、先生のお力をお借りしその時の気持ちを詩として書きました。当時は、なぜそんなことを私がやらなければならないのかと思ったのですが、今になり、その時の気持ちを素直に詩という形に残せたことは、非常に有り難かったと、その時言葉をかけてくださった先生に感謝しています。

私は、この詩とともに、日常を普通に暮らせることがいかに大切であるかを子どもたちに問いかけ、分かってもらいたいという思いで話をしています。子どもたちも非常に素直に、私の気持ちを受け止めてくれていると感じています。伝えることの大切さを実感しています。

当時小学校3年生だった長男は、本当に私を必死に支え続けてくれました。心から感謝したいと思います。しかし、子どもたちが、子どもらしい生活を送るのではなく、普通でなくなった日常の中、自分の気持ちを表現することもできずに親を支えなければならないという状況に置かれることは、あまりに過酷なことだと思います。被害に遭ってしまった家族一人ひとり、悲嘆の表現の仕方とも考えることも、望むことも違います。そういった一人ひとりにあった支援を、さまざまな関係機関の方々からしていただきたいと思います。

被害者は、泣くことも許されず、そして笑うことも許されません。私は、娘に申し訳なくて家族で旅行に行くことができなくなりました。私たちが行けないということは、子どもたちにも我慢をさせるということです。当時は、それは仕方がないことだと思っていました。事故に遭ったのだから、家族を失ってしまったのだから、被害者は楽しんではいけなく、楽しいことをしてはいけなく、そう自分に言い聞かせて暮らしていました。しかし、被害者だって楽しんでいい、笑っていいはずなのです。それを世間は許してはくれませんでした。楽しい顔をしていると、「笑っていたね」と言われたこともありました。

被害者の置かれている状況を正しく理解し、さまざまな立場の人がそれに寄り添う支援が望まれています。そのような支援体制を構築していただきたいと、心から願っています。子どもが子どもらしく、温かい家庭の中で、伸び伸びと過ごせる日が一日でも早く来るように。そのためには、やはりその家庭が笑顔を取り戻す必要があります。どうか、皆さんの支援を今後ともどうかよろしく願いいたします。



山形市 渡邊 理香

娘、祥子は、いつも私の傍に居るのがあたりまえすぎて、その存在がいかに大きいかげがえのないものだったのか、幸せすぎていた私にはわからなかつたのです。日々の暮らしに追われながらも、家族が一人としてなまじることなく過ごせるというところが、いかに大切で尊いものであるのか……。このことを少しでも多くの方に伝えることができたなら、私はいつの日かまた、祥子に逢えるような気がしています。

たった一人のあなたへ  
渡邊 理香  
あなたの誕生日はいつですか？  
どんなごちそうとプレゼントで、祝ってもちょうどうでしょう？  
家族みんなが、その日を待っているのでしょうか？  
三月三日のひな祭りには、娘の誕生日。その日が私の一番嬉しい日です。  
大切な記念日なのに、おかしいでしょ？  
あの子の靴も、服も、机も、何もかもあの日そのまま残っているのに、  
いなくなつた日からもう何年も過ぎたのに、ただいま、お母さん！と  
元気に帰ってくるような気がしてならないのです。  
私は、心の中でずっと息をこらしてあの子が帰ってくるのを待っているの  
です。  
こんなことがありました。  
「大人になつたらなんになるの？お花屋さん？誰か好きな人のところへ  
行くの？お嫁さん？」  
「そんなこと言わないで、私はいつでもお母さんそばにいます。」  
「そんなことを言うな、やさしい子で。」  
どうしてあの子が急にいなくなつてしまつたのでしょうか。どうしてあの子  
だつたのでしょうか。  
「守つてあげられなくてごめんね。」  
もう二度と笑うことのない冷たい顔。何度も何度も涙で濡れました。  
できることならもう一度抱きしめて大好きだと伝えたい、もう一度髪  
を結んであげたいのです。もう一度声を聞かせてください、神様。  
今、私は、何をしたらあの子が帰ってくれるのかを考えています。  
「お母さん、頑張らね。」と書いてほしいから。  
毎日あたりまえに金銭に困る家族を生きてくれる、あたりまえの幸せ。  
あなたが出た人がそばにいてくれる人がいて、あなたが生きていることで、  
あなたは何ものにもかえられない宝物。だってこの世でたった一人し  
かないない。あなたなんですよ！